

第35回メディコピア教育講演シンポジウム



転換期の高齢者医療

治し支える医療へ

矢富 裕

深川 雅史

滝川 一



開催日：2015年1月11日（日）

会 場：東京国際フォーラム（有楽町駅前）



富士シバイオ株式会社

—— 新しい価値の創造を通じて世界の医療に貢献します ——

転換期の高齢者医療

治し支える医療へ

9:50～10:00 富士レビオ(株)代表取締役社長挨拶 小山 剛史

10:00～10:05 はじめの言葉 矢冨 裕 (東京大学大学院医学系研究科 臨床病態検査医学 教授)

午前の部 10:00～12:30

「高齢者の医療」

10:05	司会の言葉	深川 雅史 (東海大学医学部 内科学系 腎内分泌代謝内科 教授)
10:10	超高齢社会における医療の課題と展望	辻 哲夫 (東京大学高齢社会総合研究機構 特任教授)
10:35	介護予防におけるフレイル、サルコペニアの意義	荒井 秀典 (独立行政法人国立長寿医療研究センター 副院長)
11:00	高齢者に対する治療の考え方	秋下 雅弘 (東京大学大学院医学系研究科 加齢医学 教授)
11:25	特別発言 メディアから	南 砂 (読売新聞東京本社 取締役調査研究本部部長)
11:50	総合討論(40分)	

午後の部 14:00～16:30

「高齢者の病気」

14:00	司会の言葉	滝川 一 (帝京大学医学部 内科学 主任教授)
14:05	脳神経関係:脳卒中、認知症	玉岡 晃 (筑波大学大学院人間総合科学研究科 疾患制御医学専攻 神経病態医学分野(医学医療系神経内科学) 教授)
14:30	心血管関係:高血圧を中心に	楽木 宏実 (大阪大学大学院医学系研究科 老年・腎臓内科学 教授)
14:55	高齢者の肺疾患:COPDを中心に	長瀬 隆英 (東京大学大学院医学系研究科 呼吸器内科学 教授)
15:20	骨粗鬆症:転倒・骨折とロコモティブシンドローム	遠藤 直人 (新潟大学大学院医歯学総合研究科 機能再生医学講座 整形外科学分野 教授)
15:45	総合討論(40分)	

16:25～16:30 おわりの言葉 矢冨 裕

はじめの言葉



東京大学大学院医学系研究科
臨床病態検査医学 教授

ヤトミ ユタカ
矢富 裕



主な研究領域

臨床検査医学、臨床血液学、血栓止血学、生理活性脂質

主な著書

編著「臨床検査法提要」、「今日の臨床検査」、「臨床検査値判読ハンドブック」、「抗血栓療法のノウハウとピットフォール」、「新 検査のすべてがわかる本」など

- 1983年 東京大学医学部医学科卒業
東京大学医学部附属病院内科
- 1984年 東京日立病院内科
- 1986年 東京大学医学部附属病院第一内科
- 1991年 山梨医科大学医学部臨床検査医学助手
(この間、1993年～1995年 米国ワシントン大学へ留学)
- 1997年 山梨医科大学医学部臨床検査医学助教授
- 2003年 東京大学大学院医学系研究科臨床病態検査医学助教授
同医学部附属病院検査部副部长
- 2005年 東京大学大学院医学系研究科臨床病態検査医学教授
同医学部附属病院検査部部长

医学・医療のタイムリーな問題・話題に関して、我が国の最先端研究者により、広い視野から、かつ、わかりやすく、講演・議論いただいているメディコピア教育シンポジウムは今回で第35回を迎える。幸い、好評を博し、盛会を続けているが、今回のシンポジウムでは、「転換期の高齢者医療」をテーマとした。

加齢に伴う身体の生理的な変化によって、同じ病気でも、その症状の出方や治療に対する反応は、高齢者と若年者とでは違う。また、高齢者は複数の疾患を有していることが多く、これが治療を難しくしている場合も多々ある。

一方、少子高齢化が進む中、増大する一方の高齢者の医療費への対策は日本の医療制度の中でも、最も大きな課題の一つになっている。「病院で治す」医療から超高齢社会にふさわしい「地域全体で治し支える医療」へ転換することの必要性が提唱されている。

高齢者、とくに75才以上の後期高齢者の増加が進んでいる現在、以上の通り、医学・医療両側面からの、適切な高齢者医療提供の重要性が認識されている。

この喫緊の課題に関して、例年通り、我が国のトップ・リーダーの先生方に、わかりやすい内容のご講演をお願いした。本シンポジウムにより、転換期を迎えている高齢者医療に関して理解を深めていただけると期待している。

司会の言葉



東海大学医学部 内科学系
腎内分泌代謝内科 教授

フカガワ マサフミ
深川 雅史



主な研究領域

慢性腎臓病、糖尿病性腎症、水電解質代謝異常、
骨ミネラル代謝、尿毒症

主な著書

「レジデントのための腎臓病診療マニュアル 第2版」(医学書院)
「透析患者の病態へのアプローチ 第2版」(金芳堂)
「図解：水電解質テキスト」(文光堂)
「EBM透析療法 2010-2011」(中外医学社)
「やさしい透析患者のためのリン・カルシウム代謝の自己管理」(医薬ジャーナル社)

1983年 東京大学医学部医学科卒業
東京厚生年金病院内科、公立昭和病院
腎臓内科勤務
1990年 東京大学医学部附属病院第一内科助手
1992年 米国バンダービルト大学リサーチフェ
ロー
1995年 宮内庁侍従職、侍医
1997年 東京通信病院循環器科(腎臓内科)医
師
2000年 神戸大学医学部附属病院助教授、代謝
機能疾患治療部部長
2007年 神戸大学大学院医学研究科内科学講座
腎臓内科学分野長、
戦略的独立准教授、腎・血液浄化セン
ター長
2009年 東海大学医学部内科学系腎内分泌代謝
内科専任教授

人口構成の変化にともない、医療を受ける患者の年齢は、急速に、ますます高齢化している。高齢者の医療の質と内容を考えるとき、各臓器に頻発する特有の異常を診療する前に、背景として必ず存在する老化にともなう異常の特徴と進行度をきちんと認識する必要がある。また、いずれの病気の場合にも生じうる低栄養や、長期臥床につながる変化もよく見られる異常である。これら、共通する異常に対して、病前より予防し、病気になった場合、少しでも進展を防ぐ努力がすべての症例に必要となろう。

これらを充分理解した上で、今後の医療体制や、変化して行く治療方針の方向性と課題を明らかにし、高齢者と社会にとってより良い医療とは何かを論議するのが、このパネルディスカッションの目的である。

聴衆の皆さんが、自分たちの親や自分自身、そしてそれらを支えてくれるすべての人たちのことを頭に浮かべて、それぞれの答えを出してみよう。

超高齢社会における医療の課題と展望



東京大学高齢社会総合研究機構 特任教授

ツジ テツ オ
辻 哲夫



主な研究領域

社会保障政策、高齢者ケア政策

主な著書

「日本の医療制度改革がめざすもの」(時事通信社)

「超高齢社会 日本の挑戦」(時評社)

「地域包括ケアのすすめ 在宅医療推進のための多職種連携の試み」(東京大学出版会) など

1971年 東京大学法学部卒業
厚生省(当時)入省
1988年 厚生省社会局老人福祉課長
1990年 厚生省保険局国民健康保険課長
1998年 厚生省大臣官房審議官(医療保険、健康政策担当)
2002年 厚生労働省大臣官房官房長
2003年 厚生労働省保健局保険局長
2006年 厚生労働省事務次官
2008年 田園調布学園大学教授
2009年 東京大学高齢社会総合研究機構教授
2011年 東京大学高齢社会総合研究機構特任教授

世界に例のない超高齢化が日本で進行している。

当面、急速に進む後期高齢者の急増への対応は、高齢化最前線国日本の試金石である。そのあるべき方向は、生活習慣病の予防と虚弱化の予防をまず進めるとともに、長生きの結果として虚弱な状態を経て死に至るということが普通になる中で、生きていてよかったと安心して地域の中で生き切れる、次なる社会システムを作ることである。

とりわけ今後の医療は、治すことを主眼としてきた「病院医療」に加えて、「在宅医療を含む地域包括ケア」の展開が大きな課題となっている。

柏プロジェクトでは、柏市、柏市医師会等が中心となって、地域のかかりつけ医が在宅医療に合理的な形で取り組めるようにするため研修や他職種連携のシステム化等の様々な実践を行う一方、高齢化最前線ともいえるUR豊四季台団地で、地域包括ケアを目指す典型的なモデルシステムの導入に取り組んでいる。

2025年という我が国の転換期を控えて残された時間は少ない。

市町村、地区医師会をはじめ関係者の前向きの姿勢を時代が求めている。

介護予防におけるフレイル、サルコペニアの意義



独立行政法人 国立長寿医療研究センター
副院長

アライ ヒデノリ
荒井 秀典



主な研究領域

老年医学、地域医療、フレイル、サルコペニア

主な著書

「健康長寿学大事典」(西村書店)
「老年医学系統講義テキスト」(西村書店)
「健康長寿診療ハンドブック」(メジカルビュー社)

1984年 京都大学医学部卒業
京都大学医学部附属病院内科勤務
1985年 島田市立島田市民病院勤務
1987年 京都大学医学部大学院医学研究科博士課程(内科系専攻)入学
1991年 京都大学医学部大学院医学研究科博士課程(内科系専攻)修了
京都大学医学部老年科医員
京都大学医学部老年科助手
1993年 カリフォルニア大学サンフランシスコ校ポストドクトラルフェロー
1997年 京都大学医学部老年内科助手
2002年 文部科学省研究振興局学術調査官(～2004年まで)
2003年 京都大学大学院医学研究科加齢医学講師
2009年 京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻教授
2015年 独立行政法人国立長寿医療研究センター副院長

社会の高齢化とともに、要介護に陥る高齢者数が増加し続けており、要介護とならないような予防策を講じることが重要である。老化に伴い発症し、要介護状態に至るリスクが高い病態としてサルコペニアやフレイルが注目されている。しかしながら、一般的な認知度はまだまだ低く、必要な介入が行われていないのが実際である。加齢とともに筋肉量は減少し、筋力は低下する。筋肉量の低下は歩行速度や握力の低下に繋がるが、筋肉量の減少が進むと、ADL低下、転倒、入院、死亡などのリスクが高まることが明らかになり、その病態はサルコペニアと命名された。欧米の研究グループにより、歩行速度、握力及び筋肉量を指標としたサルコペニアの診断基準が提唱されたが、欧米人との体格の違いにより、アジア人における独自の診断基準の必要がある。そのため、我々はアジアの他の国々の研究者と協同でアジア人のための診断基準を作成した。

このサルコペニアと強く関連する病態として、フレイルがある。フレイルとは、加齢に伴う様々な機能変化や予備能力低下によって健康障害に対する脆弱性が増加した状態と理解されるが、フレイルは高齢者の生命・機能予後の推定ならびに包括的高齢者医療を行う上でも重要な概念である。本シンポジウムでは介護予防を行ううえで重要な病態であるサルコペニア、フレイルの評価から介入に至る流れを整理したい。

高齢者に対する 治療の考え方



東京大学大学院医学系研究科 加齢医学 教授

アキシタ マサヒロ
秋下 雅弘



転換期の高齢者医療

◆ 治し支える医療へ

第35回メデイコピア教育講演シンポジウム

主な研究領域

高齢者の薬物療法、老年病の性差

主な著書

「薬は5種類まで 中高年の賢い薬の飲み方」
(PHP新書)

「男性ホルモンの力を引き出す秘訣」(大泉書店)

「男が40を過ぎてなんとなく不調を感じ始めた
ら読む本」(メディカルトリビューン)

1985年 東京大学医学部卒業
1994年 東京大学医学部老年病学教室助手
1996年 スタンフォード大学研究員、ハーバード大学研究員(～1998年まで)
2002年 杏林大学医学部高齢医学助教授
2004年 東京大学大学院医学系研究科加齢医学助教授
2013年 東京大学大学院医学系研究科加齢医学教授
東京大学高齢社会総合研究機構副機構長兼任
日本老年医学会理事
日本動脈硬化学会監事
日本Men's Health医学会理事

高齢者では、薬物動態の加齢変化や多病に由来する多剤服用を背景として薬物有害事象が起きやすい。したがって、まず臨床検査値などから薬物の代謝・排泄能を評価して投与量を調節する必要がある。次に、多剤服用対策は、薬物相互作用など有害事象の危険を減らすだけでなく、服薬不良や飲み間違いを回避するためにも重要であり、優先順位を考えて処方薬を最低限に絞り込む努力をする。その際に、生活習慣病の管理目標値や、ときに治療のゴールも若年成人と異なることを考慮に入れるとよい。また、認知機能障害や視力・聴力障害のある場合には、服薬管理能力に問題のあることが多いので、薬剤数と服用回数を少なくして飲みやすくする。さらに、一包化や服薬カレンダーなどの服薬支援ツール、服薬管理体制の整備などに工夫を凝らす。とにかく、治療を受ける側の視点で考えることが大切である。

講演では、高齢者とは切り離せない薬剤問題を中心に、高齢者に対する治療の考え方について解説する。

特別発言 メディアから



読売新聞東京本社 取締役調査研究本部長

ミナミ マサゴ
南 砂



主な著書

共著

「ゴルバチョフのソビエト」(読売新聞社)

「超高齢時代全4巻」(日本医療企画)

「今後の終末期医療の在り方」(中央法規出版)

「司法精神医学第2巻・刑事事件と精神鑑定」(中山書店)

1979年 日本医科大学医学部卒業

1980年 ベルギー国立ゲント大学研究員

1982年 日本医科大学助手(精神医学)

1985年 読売新聞社入社

2007年 読売新聞東京本社編集委員

2011年 読売新聞東京本社編集局医療情報部長

2013年 読売新聞東京本社編集局総務

2014年 読売新聞東京本社取締役調査研究本部長(現職)

内閣府、厚生労働省、文部科学省などの有識者会議委員を務める

国民皆保険制度の下で半世紀余、「世界で最も医療にかかりやすい国」を実現してきた日本だが、21世紀に入る頃から、医療の崩壊が危惧されるようになり、保険財政も国家財政も深刻な状況の中、人口の高齢化と医療の高度化で医療費は年間1兆円の自然増を続けている。加えて、医療現場で使われる医薬品や医療機器の貿易赤字は年間3兆円にも上る。安倍政権の成長戦略にも期待したいが、医療のありかたを巡る国民の意識転換も不可欠だ。多くの人が「医療」を治療、診療の現場、すなわち「メディカルケア」ととらえているが、健康作りや病気予防など自助努力を含む幅広い保健活動すべてを医療＝「ヘルスケア」ととらえないと将来は展望できない。「高齢者医療」は政策策定のあり方のモデルともいえる。

1977年、旧厚生省老人保健審議会ですべて初めて高齢者の医療費が若年層の4倍と指摘されて以来、高齢者医療は費用の抑制が政策上の大命題となった。公的保険医療制度であるから方向は誤っていないものの、「高齢者の医療のあるべき姿」が置き去りにされた印象は避けられない。老化のメカニズムや高齢者特異の心身の問題を研究する老年医学の専門家の声を十分に反映することなく介護保険制度が導入され、医療経済的視点から終末期医療のあり方が問題になるなど、優先順位の倒錯が社会的に波紋を投げたことは教訓とすべきである。加齢で虚弱になった高齢者への医療は生活の質を最優先に考えるべき、という議論が老年医学の知見に基づいて政策論に上っていることを評価したい。意識転換は、すべての人に求められているといえる。

司会の言葉



帝京大学医学部 内科学 主任教授

タキカワ ハジメ
滝川 一



主な研究領域

内科学、消化器病学

主な著書

編集「消化器ナビゲーター」、「ここまできた肝の科学」、「講義録 消化器学」など

- 1977年 東京大学医学部医学科卒業
東京大学医学部附属病院内科研修医
- 1979年 東京警察病院消化器センター内科
- 1980年 東京大学医学部第2内科医員
- 1984年 米国UCLA客員研究員
- 1987年 東京大学医学部第2内科助手
日本赤十字社医療センター第1消化器科
帝京大学医学部第1内科講師
- 1990年 帝京大学医学部第1内科助教授
- 1998年 帝京大学医学部内科教授
- 2010年 帝京大学医学部附属病院副院長（併任
～2013年）
- 2011年 帝京大学医学部内科学主任教授
- 2013年 帝京大学医学部長（併任）

後半のシンポジウムでは前半のパネルディスカッションでの総論的内容を受けて、様々な病気の中で、特に高齢者で問題になるものを中心に提起し、4人のこの分野のスペシャリストに講演頂く。

筑波大学の玉岡教授には脳神経疾患の中で頻度の高い脳卒中と、現在、社会問題ともなっている認知症について講演頂く。大阪大学の楽木教授には高血圧症を中心に高齢者の心血管疾患について講演頂く。東京大学の長瀬教授には慢性閉塞性肺疾患（COPD）を中心に高齢者の肺疾患について講演頂く。最後に新潟大学の遠藤教授には、整形外科分野で問題となっている骨粗鬆症について、高齢者にみられる転倒、骨折とこれらに加えて加齢に伴う種々の運動機能障害によるロコモティブシンドロームについて講演頂く。

これらの疾患は互に関連、共存することも多く、最後の総合討論ではそのあたりも含めて活発な討議がなされ、既に高齢者である方々や将来、高齢者の仲間入りをする方々に有意義な内容をお伝えできることを期待したい。

脳神経関係： 脳卒中、認知症



筑波大学大学院人間総合科学研究科
疾患制御医学専攻神経病態医学分野
(医学医療系神経内科学) 教授

タマオカ アキラ
玉岡 晃



主な研究領域

臨床神経学、老年医学、認知症、神経生化学
特に、アルツハイマー病、筋萎縮性側索硬化症、
多系統萎縮症の分子病態に関する研究

主な著書

「認知症治療薬. Pocket Drugs 2014.」(医学
書院)
「Alzheimer病. イヤーノートTOPICS 2013-2014
内科・外科疾患 第3版」(MEDIC MEDIA)
「新しいアルツハイマー病の診断基準. Annual
Review2013神経」(中外医学社)
「神経疾患に対する抗体療法-アルツハイマー
病における免疫療法- 抗体医療Update-開発
コンセプトから最新治療実績まで-、別冊・医
学のあゆみ」(医歯薬出版株式会社)

1980年 東京大学医学部医学科卒業
1982年 東京大学医学部附属病院神経内科入局
1986年 東京都老人総合研究所研究員
1989年 医学博士
ハーバード大学医学部ブリガム婦人病院
神経疾患センター研究員
1992年 筑波大学臨床医学系神経内科講師
1997年 筑波大学臨床医学系神経内科助教授
2004年 筑波大学大学院人間総合科学研究科助
教授
2005年 筑波大学大学院人間総合科学研究科教
授
2010年 筑波大学附属病院副病院長(兼任)

日常的に介護を必要としないで、自立した生活ができる生存期間である健康寿命に影響する疾患には、脳卒中、認知症、パーキンソン病、骨折、肺炎などがあげられるが、その多くは神経内科疾患の範疇に属するものである。この中から、本講演では脳卒中と認知症について解説する。

脳卒中は日本人が寝たきりになる原因の第一位を占めており、「脳出血」「くも膜下出血」や「脳梗塞」などが含まれる。脳卒中の危険因子は動脈硬化をきたす高血圧や糖尿病、脂質異常症などであり、これらの予防や治療が重要である。

アルツハイマー病(Alzheimer's disease:AD)と脳卒中による血管性認知症は、それぞれ認知症の第一、第二の原因疾患である。ADと血管性認知症は危険因子が共通しており、動脈硬化を促進する高血圧、糖尿病、脂質異常症などの生活習慣病は脳卒中の危険因子であるばかりでなく、ADの発症や進行にも影響を与える。一方、予防因子としては、ADとの関連では、野菜、果物、魚の摂取が報告されている。また、身体的活動によりADが抑制されることや、有酸素運動により高齢者の認知機能が改善され、脳萎縮が抑制されることも報告されてきた。このように、食事や運動などの生活習慣が認知症の発症に関与することが示唆されており、生活習慣病の予防や治療は血管性認知症だけではなく、ADの予防、進行抑制にもつながる可能性がある。

心血管関係： 高血圧を中心に



大阪大学大学院医学系研究科
老年・腎臓内科学 教授

ラクギ ヒロミ
楽木 宏実



主な研究領域

老年医学、高血圧学（組織レニン-アンジオテンシン系、高齢者高血圧）

主な著書

「高血圧治療ガイドライン2009」編集（ライフサイエンス出版）
「高血圧治療ガイドライン2014」編集（ライフサイエンス出版）
「健康長寿診療ハンドブック：実地医家のための老年医学のエッセンス」編集（メジカルビュー社）
「老年医学系統講義テキスト」編集（西村書店）
「高齢者高血圧の治療と管理」編集（先端医学社）

1984年 大阪大学医学部卒業
1989年 米国ハーバード大学ブリガム アンド ウイミズ病院内科研究員
1990年 米国スタンフォード大学心臓血管内科研究員
1993年 大阪大学医学部老年病医学助手
2002年 大阪大学大学院医学系研究科加齢医学講師
2004年 大阪大学大学院医学系研究科加齢医学助教授
2005年 大阪大学医学部附属病院 老年・高血圧内科科長（兼任）
2007年 大阪大学大学院医学系研究科老年・腎臓内科学教授
2014年 大阪大学医学部附属病院副病院長（兼任）

高齢者に多い心血管病は、心筋梗塞、狭心症、心不全、心臓弁膜症、大動脈瘤、閉塞性動脈硬化症である。いずれも動脈硬化の進展が関係する疾患である。「人は血管とともに老いる」という言葉通りであるが、高血圧、糖尿病、脂質異常症などの生活習慣病が長い年月をかけて動脈に障害を与えた結果といった方がより正確である。心機能低下や歩行時の下肢痛に伴う運動能低下は高齢者の生活機能を低下させる。このような心血管病の予防のためには、生活習慣病の発症予防、早期治療開始、個人ごとに設定される治療目標の達成と段階的な対応が求められる。これは、青壮年期だけでなく高齢者になってからでも重要性が確認されている。

高血圧については80歳以上を対象にした研究で心血管病の予防効果、生命予後の改善だけでなく骨折の減少、認知症を増やさないことも確認されている。高齢になってからも生活習慣病とどのように付き合うかが高齢者の健康長寿に重要であることを示す一例である。一方で、高齢者は同じ年齢でも健康度が極めて多様であり、治療のエビデンスの観点からも一律の治療方針を示しにくい。

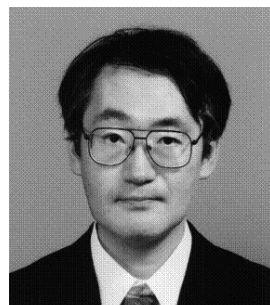
講演では、高血圧治療を例に、「治し支える」といった観点でどのような治療方針を医師に推奨しているか（治療ガイドライン）、治療を受けられる方に理解いただきたいこと、あるいは注意していただきたいことを紹介する。

高齢者の肺疾患： COPDを中心に



東京大学大学院医学系研究科
呼吸器内科学 教授

ナガセ タカヒデ
長瀬 隆英



主な研究領域

呼吸器内科学

主な著書

編書「図解：呼吸器内科学テキスト」

1983年 東京大学医学部医学科卒業
1983年 東京大学医学部附属病院研修医
1985年 東京大学医学部附属病院老人科入局
1990年 カナダ、マックギル大学留学（1993年まで）
1996年 宮内庁皇太后宮職侍医（1997年まで）
2000年 東京大学医学部老年病科講師
2003年 東京大学大学院医学系研究科呼吸器内科学教授

現在、急速に進行している高齢化とともに、呼吸器疾患の社会的重要性が急増しつつある。特に慢性閉塞性肺疾患（COPD）や肺癌などの患者数、死亡者数は年々増加しつつあり、増勢に歯止めがかからない状況にある。世界的にも、WHOによる予測では、2020年の死亡要因の第3位がCOPD、第4位が下部呼吸器感染症（肺炎など）、第5位が肺癌、さらに第7位が結核と予想されるなど、呼吸器領域疾患による死亡者数の急増が予見されている。例えば米国においては、過去40年間で、虚血性心疾患や脳血管障害による死亡数が著明に減少しているのに対し、COPDによる死亡数は増加している。また、わが国においてもCOPD死亡者数は急増しており、今後も増加傾向が続くと予想される。

典型的なCOPD患者は喫煙歴を有する高齢者であり、慢性の咳、労作時の呼吸困難を有している場合にはCOPDがまず疑われる。この際、COPDにおける呼吸困難感は持続性・進行性であり、特に高齢者においては上記の症状を加齢によるものと考える傾向があるため、注意深く診療を行う必要がある。COPDに関しては日本呼吸器学会COPDガイドラインがあり、エビデンスの集積に応じて改訂がなされている。特に最新版ガイドラインでは、COPD患者で併存症が多いことやその管理の重要性が強調されるなど、呼吸器学のみならず老年医学の要点を含めた内容となっている。

講演では、特にCOPDに関する最新の話題を中心に概説するとともに、高齢化社会における呼吸器疾患の重要性と将来の展望について考察を加える。

骨粗鬆症：転倒・骨折と ロコモティブシンドローム



新潟大学大学院医歯学総合研究科
機能再建医学講座
整形外科学分野 教授

エンドウ ナオ ト
遠藤 直人



第35回メデイコピア教育講演シンポジウム
転換期の高齢者医療
◆ 治し支える医療へ

主な研究領域

骨粗鬆症、股関節学

主な著書

「人工関節置換術-最新の知見（別冊整形外科）」
（南江堂）

「骨粗鬆症のすべて」（南江堂）

- 1980年 新潟大学医学部卒業
新潟大学医学部附属病院整形外科
- 1987年 新潟大学大学院修了
医学博士（院525号）
新潟県立十日町病院整形外科（医長）
- 1989年 新潟大学医学部附属病院整形外科
- 1990年 米国メルク社 postdoctoral scientist、
Department of Bone Biology and
Osteoporosis, Merck Research
Laboratories, West Point, PA, USA
（directed by Gideon A Rodan M.D.,
Ph.D.）1992年12月まで
- 1993年 新潟大学医学部附属病院整形外科
新潟大学医学部附属病院助手
- 1999年 新潟大学医学部附属病院講師
新潟大学医学部教授
- 2010年 新潟大学医歯学総合病院副院長、地域
保健医療推進部長、総合リハビリテ-
ション部長

ロコモティブシンドロームは運動器の障害により移動が困難になった状態であり、ADL、QOLの低下をきたす。高齢者社会の日本では運動器疾患が要介護、要支援の大きな割合を占めていることから、健康寿命を延伸させるためにはロコモの認識を高め、社会をあげて取り組むことである。なかでも骨粗鬆症は高齢者に多く、骨が脆弱となり、軽微な外力で骨折に至るものである。骨折のリスクとして「高齢であること、骨量が少ないこと、既存骨折、家族歴、ビタミンD不足」などがある。

治療と予防の戦略としては、以下があげられる。

- 1) 骨折の実態を知る。特に骨折危険因子の評価を行う。
- 2) 骨折連鎖を断つとの視点で骨折高リスク者に焦点を絞った対策から始める。
- 3) 治療と予防は継続が重要であり、そのためには医師のみならずメディカルスタッフ、行政も含めた多職種連携システムが必要である。リエゾンサービスなどを活用することは有用であろう。

生命をテーマに未来と語りたい。

私たちは医療の分野を担う企業人として、
これまでも医薬品や臨床検査薬などの研究・開発に携わってまいりました。
私たちの製品が医療の新しい可能性を拓くことのお役に立てたとすれば
それは全社員の大きな喜びでございます。
今後も未来の分野にチャレンジし続ける企業でありたいと考えております。
また、そのような企業姿勢は社名にも反映されています。

REBIO＝レビオとは、
RE（蘇生）とBIO（生命）の2つの言葉を組み合わせた、
「生命の蘇生を願う」私たちの夢を象徴するものです。
医師や検査技師の先生方のよきパートナーとなり、
かけがえのない生命の蘇生に貢献するために、
私たち富士レビオ・グループはさらに努力を続けてまいります。
これからも一層のご支援を賜りますよう、お願い申し上げます。

—新しい価値の創造を通じて世界の医療に貢献します—



メディコピア教育講演シンポジウム

富士レリオ株式会社は1981年（昭和56年）より、メディコピア教育講演シンポジウムを主催してまいりました。これからも、継続して開催していきたいと考えております。今まで開催いたしましたシンポジウムのテーマは下記のとおりです。今後の希望するテーマやご意見を、同封のアンケート用紙によりお聞かせ下さい。なお、メディコピア教育講演シンポジウムは、毎年1月に開催いたします。

第 1 回	1981.1	新しい免疫学への招待
第 2 回	1982.1	癌は制圧できるか
第 3 回	1983.1	免疫遺伝子の応用と将来
第 4 回	1984.1	人間はどこまで生きられるか
第 5 回	1985.1	食物の昔・今・未来
第 6 回	1986.1	こころと医療情報へのアプローチ
第 7 回	1987.1	風族病—その背景
第 8 回	1988.1	老人性痴呆は防げるか
第 9 回	1989.1	スポーツと健康
第 10 回	1990.1	住居と健康と病気
第 11 回	1991.1	気象病と季節病
第 12 回	1992.1	痛みの科学
第 13 回	1993.1	身近な遺伝学
第 14 回	1994.1	航空医学と宇宙医学
第 15 回	1995.1	脳はどこまでわかるか
第 16 回	1996.1	心筋梗塞はなぜおこる
第 17 回	1997.1	忍びよる糖尿病
第 18 回	1998.1	遺伝子医療
第 19 回	1999.1	骨と健康
第 20 回	2000.1	生命の科学
第 21 回	2001.1	肥満
第 22 回	2002.1	話題の感染症
第 23 回	2003.1	高齢者と医療
第 24 回	2004.1	メンタルヘルス
第 25 回	2005.1	アレルギーと関節リウマチ
第 26 回	2006.1	食物と健康
第 27 回	2007.1	21世紀の対がん戦略
第 28 回	2008.1	睡眠と健康
第 29 回	2009.1	インフルエンザの最前線
第 30 回	2010.1	動脈硬化をめぐって
第 31 回	2011.1	腎臓病
第 32 回	2012.1	血液の病気
第 33 回	2013.1	肝臓の病気
第 34 回	2014.1	栄養と食欲
第 35 回	2015.1	転換期の高齢者医療



メディコピア教育講演シンポジウム実行委員会

〒163-0410 東京都新宿区西新宿2-1-1 新宿三井ビルディング
富士レビオ株式会社